

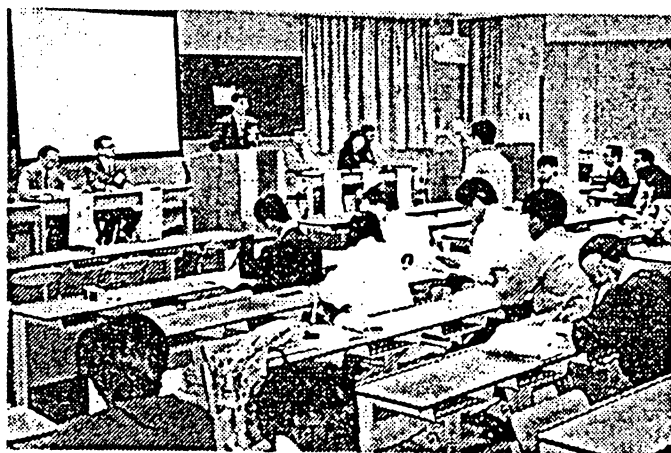
# 神戸での第5回学会大会から

## 幼児から社会人まで

# 自然との共生を探る

# 環境教育

自然の大切さを子どもたちに教えるだけでなく、すべての人に物質、科学文明にどう振り回された価値観を養ってもらおうとプロセスとして、環境教育が注目されている。このほど、神戸市東灘区の甲南大学で開かれた「日本環境教育学会第五回大会」では、幼児から小・中・高・大学、そして社会人教育の実践報告はもろろん、哲学や文明論など幅広いテーマで、研究発表やシンポジウムが開かれ、さらに、奥須磨公園(同市須磨区)のフィールドワークも実施された。兵庫県内の実践例を中心に、同会議のトピックをいくつか紹介する。



さまざまな研究発表やミニシンポジウムが開かれた、日本環境教育学会第5回大会—神戸市東灘区、甲南大学

## 新たなモデル 確立が課題に

(相川 康子記者)

今大会の大きなテーマは「起ったかを考えず、この『文明の問い直し』のための『環境教育』。既存の教育の枠にははめられない環境教育の理論や意義を追究する」にあり、人間をさまざまな部位の集合体とみる医学は一方、それを実践するたに、既存のもの一例えは授業や催し、自然公園や博物館といった施設をどう使うかの模索も行われ、この二つの議論の擦り合わせが焦点となった。

理論的な追究では、変革の矛先は、医学や哲学にも向けられた。

特別講演を行った大阪大名誉教授の中川米造さん(環境医学)は、これほど文明が発達して医学が進歩しても、病人の数が減らないばかりか、産業化に伴う人口集中や労働強化で、新たな疾病が増えていることを指摘。「なぜその疾病が

また先人の知恵を見直すこと、熊沢蕃山や安藤昌益、南方熊楠ら日本の思想家の自然観の研究報告も行われた。広島工業大学専門学校まちの人づくり」と題されたシンポジウムでは、教

環境破壊や人類滅亡を警告して「恐れ」を抱かせるだけでなく、人間が進んで環境保護の実践に向かうような新しいモデル—環境倫理の思想が必要—と話す。

「それは生態系に対する畏れ(おそ)れや『感動』かけに力を注がない(八尾ら生まれるのは)と人の原点、意識のありようを強調した。

このような「価値観の変革」や「人間と自然との健全な関係」といった言葉を、本当に分かり、さらに行動につなげていくためには、どのようなきっかけやプログラムが必要なのだろう。

現在のところ、環境教育は、関心のある一部の教諭や市民グループによって、さまざまな実践が行われているレベル。人間形成やまちづくりへと、無限の広がりを持つというが、今のところ野外活動の側面しか光が当たっていない。

実践への手掛かりを、自然の知恵を継承しつつ、進む方向を探っていくほかに、教

## ネイチャーゲーム

「さあ、鳴いてごらん」座も開かれていたが「マ」が目隠しをした二十人の男女がビビー、ギャアキアと声を上げながら、室内を手探りで動き始めた。初めに一人一枚、鳥や虫の種類を書いたカードが手渡された。

「研究会」とか、学会中に開かれたワークショップ

ユージランドは、もともと生態系に、入植者が持ち込んだ犬などが侵入したため、絶滅の恐れがある小動物がおり、その実態を知ってもらうのが狙いという。「何を伝えるのか目的をはっきりさせてから、手法を考え」とリンダさん。

## 自然のリズムに耳傾けよう

実行委員長の谷口文章・甲南大助教授の話 日本環境教育学会は一九九〇年に発足、研究者や現場教師、市民グループを中心に千



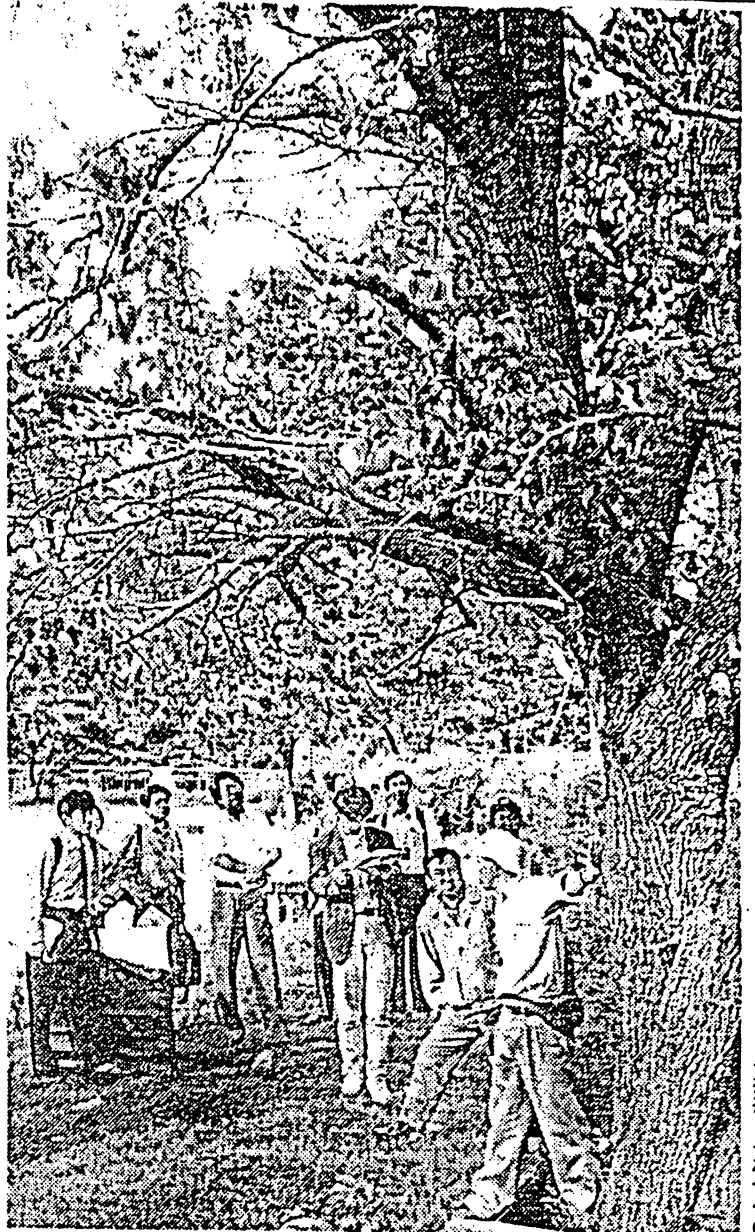
三百人の会員がいる。五回大会を迎え、環境教育のウハウハマニアル作りだまで議論されるようになった。個人的な見解を書かせ

三人の会員がいる。五回大会を迎え、環境教育のウハウハマニアル作りだまで議論されるようになった。個人的な見解を書かせ

市民グループを中心に干

てせらば、今日の環境問

たな疾病が増えていること  
を指摘。「なぜその疾病が



奥須磨公園で行われた自然公園の活用法を考えるフィールドワーク＝神戸市須磨区

神戸市総合教育センターの米田勲指導主事を中心とする教諭らの研究グループは、昨年十一月、市内の小・中・高校で児童・生徒の環境問題に対する意識調査を実施。酸性雨や大気汚染、オゾン層破壊などについて「どうして知っているか」「もっと知りたいと思うか」「どうしたらいいか」などについて、「石油枯渇や温暖化による海面上昇がいつごろ起こると思うか」を聞いた。

### 神戸市総合教育センター 児童らの意識調査

破壊については中学生の六三％が「知っている」、三四％が聞いたことがある」と答えた。ところが、それらの事態が深刻化する時期については「百年以内」や「もっと先」などと、自分が生きている間は大丈夫かと思っている生徒が多かった。

### 兵庫県内で、こんな実践

生徒たちに環境問題を身近に感じてもらうには、どうすればよいか。兵庫教育大学付属中学校では、昨春秋、三年生を対象に酸性雨のデータベースを活用した実践を行った。同中学校がある社町と尼崎、明石、柏原の四方所に一年間に降った雨の量やpH（酸性・アルカリ性を示す指標）、含有イオンの種類や量を、兵教大の院生がデータベース化。実際の授業は五時間かけ、初めに酸性雨のメカニズムについての講義、次に三時間かけて生

### データベースを活用

徒らにデータ分析をさせ、最後にまとめを行った。指導にあたった秋吉博之教諭によると、生徒らは、工業地域だけだと思っていた酸性雨が地元の社町でも降っていることに驚いた様子。また、含有イオンの種類を知ることで大気汚染への関心が深まったという。「データベースは一見難しそだが、簡単に図表化でき、降水量と雨の関係をみくらん」などと、ある程度こらうで誘導すると中学生でも立派に使いこなす」と秋吉さんは言う。

環境教育は学校現場だけで行うものではない。コープこうべの職員と組合員有志でつくる「環境問題研究会」は、五年前から、家庭でできるごみ減らしなどの啓発を続け、現在は子ども向けの学習プログラム作りにも力を入れている。環境学習といっても、野外活動だけではなく、テーマは普段の暮らしの中から見つける。例えば自動販売機の調査。どこに、どんな販売機が何台あったか、空き缶などのごみはどうか、を歩いて調べ、便利さの裏

### 暮らしテーマに学習

のこみ問題やエネルギー消費を考える。また、あるときは廃物の山の中から、修理・修繕できるものや別用途に使えるものを選び、リサイクルのアイデアを出し合う。「調査や活動を通じて、実感として「分かる」ことが大事。自分の暮らしや行動が環境に及ぼす影響を考え、どうすれば良いかを考えてほしい」と同研究会の岩本啓子さん。これらのプログラム案は、環境学習ヒントカード集として、来月初旬、発行の予定という。

### 身体で感じて 環境問題学ぶ

アキアと肩を上げながら、室内を手探りで動き回ら、最初の一人一枚、研究会とか。鳥や虫の種類を書いたカードを渡してある。カードは十種類、二組ずつ。だれが何を持っているかは分からない。必死に鳴きまねをしながら、同じ声の相手を探す。天敵がない場合は、全員が無事にペアになれたが、声を頼りに虫や鳥を捕まえる。捕食者が入ると、ペアを組む暇もなく全員が捕まってしまう。環境問題を楽しむ、その導者、リンダ・パインズとして身体で感じるためのゲームを招いて、オリジナ手法として注目されている「ネイチャーゲーム」だ。米国のコーネル氏が考え、冒頭のゲームは、エサたプログラムが日本でも翻訳され、指導員養成講座の関係を築くゲーム。二た。参加者の一人、神戸・地球環境研究会の東條健司代表は「本を読んだり話を聞く以上に、環境意識を高める効果がある。公教育の中でも取り入れられるべき」とゲームの効果に期待をよせている。

神戸市の環境問題